311ゼミナール2024年度第6期

次世代伝承班

活動報告書

第6期 次世代伝承班・活動メンバー

G3029　原萌夏　4年	G3033　猪狩光希　4年
G3252　小山有美華　4年	G5079　後藤咲佳　2年
G5080　後藤美姫　2年	G5130　関町咲穂　2年
G5179　星陽菜乃　2年	G6183　深澤このみ　1年
G6225　渡邊穂香　1年	

目次

1. 活動の概要

2. 活動の詳細

2-1.紙芝居による伝承活動の視察・聞き取り

〇日和幼稚園遺族有氏の会　佐藤美香さんの紙芝居・絵本による伝承活動

・佐藤美香さんについて
・視察の概要
・伝承活動の様子
・佐藤美香さんへの聞き取り
　・伝承活動への思い
　・紙芝居による伝承活動への手ごたえと課題
　・今後の展望

〇きずなFプロジェクトによる紙芝居での伝承活動

・きずなFプロジェクトについて
　・視察の概要
　・伝承活動の様子
　・Fプロジェクト　紀伊國さんへの聞き取り
　　・伝承活動への思い
　　・紙芝居による伝承活動への手ごたえと課題
　　・今後の展望

〇二つの活動を視察してのまとめ

2-2.紙芝居、絵本、漫画等による伝承の現状

・調査概要
・調査結果（県単位、タイトル、完成年度、内容）
・考察

2-3.メンバーの被災・避難体験を紙芝居化するプロジェクト

・経緯
・第6期でできたこと（シナリオ）

3.メンバーの振り返り

1. 活動の概要

私たちは2023年度第5期から、「東日本大震災を知らない世代に、出来事と教訓をどう伝承していくか」をテーマに活動してきた。

第5期では、当時子どもだった人たちの被災体験と思いを漫画にまとめ、伝えている公益社団法人3.11メモリアルネットワークの活動を視察し、現地での語りと漫画による伝承の違いや成果について考察した。同時に、グループメンバーの被災・避難体験を紙芝居化するプロジェクトにも取り組み始めた。

2024年度第6期は、紙芝居や絵本等による伝承の現状を調べることを目標に、実際に紙芝居や絵本を使って伝え継ぎをしている個人やグループの活動を視察し、聴き取りを行った。加えて、岩手・宮城・福島でそのような活動がどれぐらいあるのかをネット上で調べて、その意義を考察することにした。5期から始めた「メンバーの被災体験を紙芝居化するプロジェクト」については、シナリオ作成まで進めた。

2. 活動の詳細

2-1.紙芝居による伝承活動の視察・聞き取り

■日和幼稚園遺族有志の会　佐藤美香さんの紙芝居・絵本による伝承活動

(1)佐藤美香さんについて

佐藤美香さんは、宮城県石巻市を拠点に活動している「日和幼稚園遺族有志の会」に所属している。日和幼稚園遺族有志の会は、2011年(平成23年)3月11日に起こった東日本大震災で、石巻市南浜地区にある日和幼稚園の園児が乗った送迎バスが津波に襲われ、4歳から6歳の園児5人が命を落とした出来事を受け、園児遺族の有志が結成した。

美香さんは次女愛梨ちゃんを亡くした。大音量のサイレンとともに大津波警報、避難をうながすメッセージが防災無線から流される中で、園児たちは送迎用の幼稚園バスに乗せられ、津波と火災に巻き込まれて亡くなった。

安全であるはずの幼稚園があった高台から、なぜ沿岸部にバスは向かったのか、なぜ助かるはずの命が失われたのか、調べなければ何もわからない状態だったという。

美香さんは「もう二度と娘のようなことは起こってほしくない」という強い思いのもと、語り部として現場に立ち、小中学生や修学旅行で訪れる児童生徒らに出来事を伝え続けている。その一環として、最近は紙芝居や絵本を使って幼児にも伝承する取り組みを始めた。「次の世代の子どもたちが生き延びてほしい」「こういうことが起こってほしくない」という思いで活動している。

(2)視察の概要

佐藤美香さんの紙芝居・絵本による伝承活動は、2024年8月10日に、震災伝承活動の連携に取り組む公益社団法人3.11メモリアルネットワークが石巻市「MEET門脇」で開催した「絵本・紙芝居の読み聞かせ会」で視察した。

参加人数は私たち3人を含めて10名ほど、生徒も含まれていた。佐藤美香さんは、スクリーンをバックに紙芝居『忘れないよ 小さな命と あの日のこと』と

絵本『2人の天使にあったボク』の読み聞かせを行った。紙芝居は宮城学院女子大学、絵本は仙台白百合女子大学の学生有志とともに作ったという。読み聞かせ会が終わった後には、私たち震災伝承グループのメンバー3人が美香さんにインタビューを行った。

写真は3.11メモリアルネットワークfacebookから引用：【紙芝居と絵本 読み聞かせ】

(3)紙芝居・絵本による読み聞かせの様子

読み聞かせは、美香さんの落ち着いたトーンで始まり、感情の乗った声にメモを取ることも忘れるほど引き込まれた。読み聞かせが終わった後、泣いている方も数名いた。質疑応答でも涙声の方が多数だった。

美香さんのお子さんの追体験をしている、そのような気持ちになる部分と、美香さん自身の「なぜ」「どうして」という気持ちがひしひしと伝わる読み聞かせであった。

その後、メンバーによるインタビューでは、紙芝居による伝承で感じたことを質問させていただいた。紙芝居『忘れないよ 小さな命と あの日のこと』のバスの窓から津波が見えるシーンでは、津波の波の面に、おばけのような表情が描かれていた。そういった演出が子どもたちに津波の怖さを伝えているのではないかと感じた。美香さんはこの部分を大学生とともに考えたという。「津波が襲い掛かってくる様子を現実として描くのはどうなんだろう、工夫ができないか」という話が出て、おばけの表現になったそうだ。

美香さんの読み聞かせでは、声のトーンが大人であっても怖さが伝わるものであった。こういった声のトーンを意識することが、子どもたちに正しい恐怖を感じてもらえる工夫であるとも感じた。ただ「怖かった」と思考停止させてしまうのではなく、こういった辛く悲しい出来事が二度と起きないためにどうすればよいかを考えた演出だった。

今回は絵本の方も聞かせていただき、ここでも波の絵についての特徴と考えさせる場面があった。絵本は可愛いタッチとリアルなタッチの2種類で描かれており、一冊の本で絵柄が変わるという初めて見る形式だった。

何より印象的だったのは、津波が街に押し寄せる場面だ。何も文字が書かれておらず、説明もない見開きのページだった。ここは、あえて言葉を添えず、自分の中で想像してもらうという意図があるそうだ。この説明のないページを実際に読み聞かせで聞いたとき、私たちは想像し、様々な思いを巡らせた。津波の恐怖、飲み込まれる恐怖、助けることのできない無力感、そういった感情が溢れ出てきた。これは自分で考える、とても良いきっかけになると思った。

(4)佐藤美香さんへのインタビュー

佐藤美香さんには、後日メールによる質問も行い、紙芝居・絵本による伝承活動の成果や今後の展開について尋ねた。

〈伝承活動への思い〉

「娘の命を無駄にしたくない思いとともに、もう二度と同じ様な悲劇を繰り返して欲しくないという思いで続けている」

〈紙芝居・絵本で工夫したこと〉

「紙芝居を作る際に、子どもたちにもわかりやすく伝えるため、物語の凝縮、伝えたいポイントを絞るなどの工夫を凝らした。子どもたちの視点に立ち、優しい言葉、わかりやすい言葉を幼児教育を専攻している先生や学生と言葉を選んだりしながら進めていった」

〈紙芝居による伝承活動への手ごたえ〉

「紙芝居や絵本を使って幼稚園や保育園に出向き読み聞かせを行っていると、子ども達は真剣に聞いてくれる。「津波ってこんな事だったんだ…」と理解してくれたり、私たちの娘達に起きた出来事を悲しんでくれたりしてくれる。また、紙芝居を聞いた後に家に帰ってお母さんやお父さんに話をして家庭で出来る事はなんだろう、と話をした子もいた」

「大人の反応としては、子ども達と一緒に聞いてくれた先生達が、涙を流しながら聞いてくれたり(子ども達も涙を流しながら聞く子もいる)、その後の避難訓練にも繋がった」

〈今後の展望〉

「亡くなった娘と同じ年齢層の大学生の皆さんと連携し、何かしらの活動をして行けたらと思っている」

「紙芝居は宮城学院女子大の学生、絵本は仙台白百合女子大学の学生達と共に制作した。大学生はまだまだこれから先(命)が長い。美香さん自身、あと何十年自分達だけで伝えられるか分からないので、少しでも大学生が関わってくれたら幸い」

「そして、教育機関で子ども達の命が守られる社会になって欲しいと切に願い、今後も語り部をやって行きたい。娘に起きた出来事を知ってもらう為に、色々な所で講演が出来ればとも思っている」

■きずなFプロジェクトによる紙芝居での伝承活動

(1)きずなFプロジェクトについて

きずなFプロジェクトは、2016年3月、宮城県七ヶ浜町立向洋中学校の生徒が、東日本大震災について学ぶ「震災学習」をきっかけに立ち上げた有志チームである。卒業した後も活動を継続しており、30人が所属する。その中には、先輩の後を継いで新規に参加した中学生も2人いる。

この団体では、震災伝承について「これから震災を知らない子どもが増えていく。そのような子どもに対して、私たちが用いることのできる媒体であり、伝わりやすく、誰にでも伝承できる媒体は紙芝居である」という考えをもとに、紙芝居を作成し、上演して伝承活動を続けている。

(2)視察の概要

2024年10月20日の日曜日、仙台市立住吉台小学校で行われた「いのちがまんなか～東日本大震災ときずなFプロジェクト」の視察を行った。

きずなFプロジェクトは、住吉台小学校5年生と保護者約30人に対して、活動紹介や東日本大震災についての講話、紙芝居の上映、防災クイズ、質疑交流を行った。

写真はきずなFプロジェクト提供

(3)伝承活動の様子

紙芝居は10枚あり、きずなFプロジェクトのメンバーが一枚一枚引き抜きながら、語りを進めた。紙芝居の画面は別のスクリーンでも映し出されていた。

一枚ずつの言葉の説明は短く、実際の出来事や場面を想像させるような感じで進んだ。全体で5分程度で終わり、子どもも集中して見られる時間だった。

紙芝居の概要と特徴は以下のとおりである。

イラスト	優しいタッチ 表紙のイラストが特に印象的(主人公の双子の2人が手を繋いでいるイラスト)
紙芝居のタイトル	「みゆうとゆうみ」
シナリオ	①表紙 ②家族構成 ③2011年3月11日に何をしていたか ④震災後の様子 ⑤津波の様子 ⑥避難所の様子 ⑦震災から1か月後、母と祖母とのお別れ会 ⑧中学校の体育祭での辛い気持ち ⑨震災の様子を詳しく聞いた2人 ⑩語り部になった2人が伝えたいこと
言葉遣い	分かりやすい言葉遣い 直接的な表現は避けて優しい言葉を使用していた ex)お葬式→お別れ会 死んでしまった→天国に行ってしまった
紙芝居の枚数	10枚
紙芝居の時間	約5分
話す速度	基本的にゆっくり　伝えたい言葉は特にゆっくり
声色	大きな変化は無いが、会話文とナレーション文　で声の高さや声の大きさに変化があった。 会話文は人によって声色の変化はあるが、ナレーション文は変化なく平坦な感じだった。
その他	・家族の誰かが亡くなってしまう話だったが、　終わった後に心が重くならなかった ・紙芝居と紙芝居のスライド(テレビに映して)どちらも用意していた

(4)紀伊國七海さんへの聞き取り

きずなFプロジェクトの結成時から代表を務めた紀伊國七海さん(宮城学院女子大4年)に、後日のメールによる質問も含めて、活動への思いと紙芝居の成果についてインタビューした。

〈伝承活動への思い〉

「プロジェクトが始まったきっかけは中学生時代。学校の中のFプロジェクトという有志団体を立ち上げて震災復興活動をしていた。その活動の1つとして語り部活動を行っていた。震災を知らない子どもたちに伝えていくために有効な手段を話し合い、語り部のように耳で聞くだけでなく、目で見ても分かるように紙芝居を作ることを決めた。制作期間は約1年。初代メンバーが高校1年生の春頃(2018年5月)から取り掛かり、高校2年生(2019年6月くらい)に完成した」

「結成当時から変わらずあるのは「震災を知らない子どもたちに震災を伝える」こと。「災害が起こった時に子どもたちがどう行動すれば良いか考えるきっかけづくり」にもなればいいという思いをもって活動している」

〈紙芝居による伝承活動への手ごたえ〉

「紙芝居による伝承活動への手ごたえは、上演後に子どもたちが感想を書いてくれること。そこには、地震や津波の怖さを痛感している子や、活動を応援してくれる子、自分はこのように防災に取り組んでいきたいと宣言してくれる子など、様々な想いが書いてある。子どもたちが災害を考えるきっかけになれていると感じる」

「出前授業で招かれることも多くなったが、みんな集中してアクティビティに楽しく参加してくれる。震災を知らない世代に伝える手段として、紙芝居の伝承の手応えを感じる」

〈今後の展望〉

「課題は、団体内で初代メンバーと後輩との熱量の差が大きいこと。自信が持てなく消極的になってしまいがちな後輩たちのために紙芝居の活動の場を設けることが課題。後輩たちにも「自分たちにもこの方法で伝承したい」という思いを持ってもらえるように学習の場の提供や活動を行っていきたい」

「今後は後輩のための学習会(震災遺構見学・やりたいことを考えるなど)を実施していきたい。また、学校などでの震災伝承活動は、これからも引き続き行っていきたいと考えている。ただ、全体の進行をほとんど紀伊國がやってきたが、4月から教員になり平日の活動が難しくなる。今までとはスタイルがすこし違ってくるとは思うが、子どもたちへの伝承は変わらず続けて行きたい」

■二つの活動を視察してのまとめ

佐藤美香さん、きずなFプロジェクトの活動を視察し、インタビューで聞き取りをすることで、紙芝居や絵本による伝承の成果と意義について、理解を深めることができた。

2つの紙芝居は、どちらも子どもたちに向けて作成したものであり、上演の現場では優しい言葉づかいや声のトーンを変えることなどが意識されていた。伝承する手段を検討する際に、どの年代のだれを対象にして伝えるか、という意識がとても重要であることがわかった。視察してみて、やはり、子どもに伝える媒体として紙芝居はかなり有効であると感じた。

利点としては、震災を知らない子どもたちに、まずは震災の出来事に関心を持ってもらうきっかけを作るという点が挙げられる。食い入るように聞き入り、静かに耳を傾け、時には涙を流して聞き入っていた子どもたちの様子を見ていると、紙芝居の上演は、震災について、そして教訓に基づく備えや防災について十分に子どもたちに考える機会になっていたと受け止めた。

紙芝居自体についても多くの工夫が施されていた。津波のイラストにおばけの顔が描かれていた例が象徴的だろう。いたずらに恐怖を植え付けない配慮の一方で、災害の怖さを別の表現できちんと伝えようという姿勢が感じられた。子どもだけでなく、震災を体験していない大人にも、同様の効果が期待できる。

メンバーの被災・避難体験を紙芝居化するプロジェクトを進めるにあたって、視察と聴き取りで得た上記の知見を活かしていきたい。

2-2.紙芝居、絵本、漫画等による伝承の現状

(1)調査概要

東日本大震災の伝承では、発災10年になる2021年あたりから紙芝居や絵本、漫画等で伝え継ぐ活動が目立ち始めた。岩手、宮城、福島でどのような事例があるか、背景としてどんなことが考えられるか、まとめて整理した文献等はなかったため、調べることにした。調査は、インターネットによる検索等で拾う方法にした。

(2)調査結果(県単位、タイトル、完成年度、内容)

■岩手県

実施者・団体	タイトル	対象	内容	印象	完成年代
今野義雄さん(元校長)(岩手県小学校長会が依頼)	『地震が来たらすぐ高台に!』 写真はおはなしの森まつぼっくり隊から引用:みたけ児童センターおはなし会「3.11を忘れない」	小学校低学年(2年生)	校長を務めていた大船渡市内の小学校で被災した自身の体験談。当時の避難の様子、津波の恐ろしさなどを伝える。	リアル、津波の描写もある	2014年 作成開始 2015年 1月完成
花巻南高校、花巻北中学校	『れんしゅうしててよかったね』(既存／ 宮崎二美枝 脚本／夏目尚吾 絵／原本憲子 監修) 写真は童心社から引用	地元の幼稚園児	避難訓練、二次避難の大切さを伝える。	イラスト、かわいらしいイメージ。	
横道毅さん	『吉浜のおゆき』(作成:大船渡津波伝承館)	国の復興支援イベント	明治三陸大津波からの教訓	少し怖い	語り活動は2015年から

多世代交流館・居場所ハウス@大船渡市末崎町	『ワンコとともに救われた命』 	子供から大人まで	同町で被災した大和田さんの体験、救助や避難所生活などの経験談。		2022年6月完成
新地町語り部村上美保子さん	『命に次に大切なもの』 写真はクラウドファンディング-READY FORから引用：東京で「ふくしま被災地まち物語」を被災者自ら紙芝居で伝えたい	子供から大人まで	震災当時の様子	イラスト、わかりやすい	
岩手県立釜石高校2年生5人	『津波てんでんこ』	地元の小学生	小学生の時の被災、避難体験を元に作成、津波てんでんこの教訓。		2018年
宮古市教育委員会　学校教育課	『あむくんのいのちをまもるおはなし』 		避難について		2019年

参考文献

・NHKアーカイブ．”津波体験を描く紙芝居”．NHK．https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0026020889_00000，（参照 2025-01-28）．

・岩手 NEWS WEB．”幼稚園で中高生が震災についての絵本を読んだり 紙芝居上映”．NHK．https://www3.nhk.or.jp/lnews/morioka/20240311/6040020951.html，（参照 2025-01-28）．

・NHK盛岡放送局　記者　天間暁子．”「紙芝居」で伝える命を守るメッセージ”．NHK．2023-01-17．https://www3.nhk.or.jp/news/special/shinsai-portal/12/special-articles/article/article_01.html，

・”語り継ぐあの日⑦横道　毅さん（50）”．Web東海新報．2019-09-11．https://tohkaishimpo.com/2019/09/11/263767/，（参照 2025-01-28）．

・”震災の経験と教訓 紙芝居に　末崎町の居場所ハウス　町民の被災体験基に制作”．Web東海新報．2023-07-23．https://tohkaishimpo.com/2023/07/23/408096/，（参照 2025-01-28）．

・千葉テレビ放送株式会社．”「東日本大震災の記憶を語り継ぐ」 福島の女性が柏市で紙芝居読み

聞かせ”. チバテレ. 2024-09-28. https://nordot.app/1212678952799191066?c=428427385053398113, (参照 2025-01-28).
・毎日小学生新聞. ”東日本大震災7年　紙芝居で伝える震災の教訓　岩手・釜石の高2が小学生に防災講座”. 2018-03-15. https://mainichi.jp/maisho/articles/20180315/kei/00s/00s/005000c, (参照 2025-01-28).
・”紙芝居「あおくんのいのちをまもるおはなし」”. 宮古市災害資料アーカイブ　みやこあす. https://miyako-archive.irides.tohoku.ac.jp/sae/item/01GW4FH5X8FF1WDV25FHKYQHPD, (参照 2025-01-28).

■宮城県

実施者・団体	タイトル	対象	内容	印象	完成年代
せんだいメディアテーク	『ふるさとがきえた～東日本大震災物語～』 	自作教材として作成	若林区荒浜「吉田家」を通して、震災当日とその後を描く。	リアルよりのイラスト、地震が起こった描写の時には絵を動かして読み聞かせている。	2013年
「きずなFプロジェクト」	『みゆうとゆうみ』 	小学生	津波で母と祖母を亡くしたメンバーの体験を元に作成。	優しい感じ、イラスト	2019年6月
佐藤美香さん、宮城学院女子大学の生徒たちと連携	『忘れないよ小さな命とあの日のこと』 写真は大学プレスセンターから引用：https://www.u-presscenter.jp/article/post-50210.html	防災イベント、防災教育で公開	自身の長女（当時　幼稚園児）の被災。	イラスト、津波の描写もある	2022年3月
宮城県大崎市 田村さん夫妻	『ふしぎな光のしずく～けんたとの約束～』		東日本大震災の津波で息子を亡くした両親の物語。 東日本大震災の伝承と穏やかな日常の幸せと		2024年

			親の愛情、命の大切さを伝える絵本。		
公益社団法人3.11メモリアルネットワーク	『あの時、子どもだった私たちから伝えたいこと』 		東日本大震災当時、小学～高校生だった子どもたち6人の体験を描いた漫画。	かわいらしい絵柄で、読みやすい。	2023年 3月11日

参考文献

・”ふるさとがきえた　～東日本大震災物語～”. せんだいメディアテーク. https://www.smt.jp/library/teaching/archives/d14029.html, (参照 2025-01-28).

・”震災教訓、紙芝居で伝承　宮城の若者団体”. 日本経済新聞. 2023-01-28. https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUE24DCA0U3A120C2000000/, (参照 2025-01-28).

・野田佑介. ”命の尊さ　紙芝居で届け　宮城・高校生の被災体験　富山”. 朝日新聞デジタル. 2021-03-02. https://www.asahi.com/articles/ASP316VPMP2RPISC007.html, (参照 2025-01-28).

・”震災で長女を亡くした母親と大学生が紙芝居を作成　受け継がれる教訓のバトン”. 2022-09-13. https://www.khb-tv.co.jp/news/14717648, (参照 2025-01-28).

・”【河北新報社】命の大切さ　絵本に込め”. 一般社団法人　健太いのちの教室. 2024-04-09. https://kenta-inochiclass.com/2024/04/09/, (参照 2025-01-28).

■福島県

実施者・団体	タイトル	対象	内容	印象	完成年代
環境省　環境再生プラザ	『ふくろう先生のほうしゃせんきょうしつ』 第1巻	小学校低学年	4巻あり、東日本大震災はどのような被害をもたらしたのか、放射線とはなにか、などについて動物たちが会話する形式で説明される。	イラスト、かわいい	

浪江まち物語伝え隊　岡洋子さん八島さん	『無念』	福島県広野町	自身も福島県浪江町で被災。地震に加え、原発事故の中で救助活動を行った消防団の様子を描いた紙芝居を各地で読み聞かせている。	イラスト、リアル寄り	2014年 有志も参加し「浪江まち物語伝え隊」が本格始動
福島市保育士	『ふくしまの記憶』	幼稚園生、小学生	東日本大震災当日から、その後の保育所活動の記録。	視覚的にわかりやすい	4年前にYouTubeに投稿。

参考文献

・環境再生プラザ．”小学校低学年（1～2年生）向け 紙芝居「ふくろう先生のほうしゃせんきょうしつ」”．環境省．https://josen.env.go.jp/plaza/materials_links/kamishibai_fukurou.html，（参照 2025-01-28）．

・荻 仁．”「震災の記憶」紙芝居で伝える　八歳から13年…風化どころか全国から引っ張りだこ、フランスでも上映【東日本大震災13年】”．J-CASTニュース．2024-03-07．https://www.j-cast.com/2024/03/07479184.html?p=all，（参照 2025-01-28）．

・NHKアーカイブ．”紙芝居で震災を伝える”．NHK．https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0026020975_00000，（参照 2025-01-28）．

・福島市公式ユーチューブ［ふくしまチャンネル］．市保育士によるデジタル紙芝居「ふくしまの記憶」．YouTube．https://www.youtube.com/watch?v=Mg-lhyKTlEU，（参照 2025-01-28）．

【参考】令和6年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の実践校

福島県は震災と復興に関する地域課題探究学習を通して、福島における震災、復興、そして未来について、自分の考えを持ち、自分の言葉で語ることのできる高校 生（「高校生語り部」）を育成する。この学びの過程で、生徒の思考力、判断力、表現力等を育成するとともに、県内外及び海外の高校生等との交流を通して、震災に関わる風化防止、風評払拭につなげている。その中で、あさか開成高校、ふたば未来学園などが紙芝居の読み聞かせ活動を行うための研修に参加している。

●令和6年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の実施校

・あさか開成高校

［2023年12月13日］（安積高校と連携）

タイでの研修（記事には文化交流とあったので、タイでの伝承活動は不明）

富岡町3.11を語る会とも連携

・ふたば未来学園

［2024年11月19日］富岡市

語り部活動中の高校生や興味がある若者（約80人）の交流会にで発表（後継者育成）している

(3)考察

インターネットによる拾い出しは、網羅的に完遂できたわけではない。まだまだ、リストアップしきれなかった紙芝居、絵本、漫画による伝承活動が多くあるはずだ。

ただし、私たちが短期間に整理しただけでもこれだけのリストができたことに、まずは驚いている。これほどまでに、学校や非営利団体など様々な団体が紙芝居、絵本による伝承活動を行っているとは思っていなかった。活動を継承し続けるために団体同士の交流を深めたり、地域の学校と連携したりしている団体もあった。

多くの紙芝居や絵本、漫画が、やはり震災10年あたりから作成が進み、その伝承活動もここ2-3年で活発になっていた。

背景として、震災から時間が立ち、震災を知らない世代に対して何をどう伝えるかという伝承の課題への一つの方策として、親しみやすい媒体が求められたことが挙げられる。

さらに、震災の出来事や教訓を生々しい映像や写真、語りで伝えることが主体だった伝承活動は、10年を過ぎるあたりから、防災や備えといった視点を超えて、いのち尊さや助け合いの大切さ、困難に直面して得られた未来への希望といった普遍的な価値観も含めたものまでやり取りする現場になっている。その点でも、核心を世代を超えて多くの人と共有できる紙芝居、絵本、漫画の必要性が高まったと考えられる。

個々で活動している団体が連携を始めたり、学校との協力体制も広まったりしているため、これからも紙芝居、絵本による伝承活動は増え続けていくのではないか。また、地域の防災イベントや学校での読み聞かせ活動は、恒例化し引き継がれて行くのではないかと考える。
一方でいくつかの課題も挙げられる。一つ目は、活動形態である。紙芝居での伝承活動を行っている団体の中には、紙媒体の他にデジタル資料を使用している団体も少なくはない。プロジェクターがない会場や屋外での活動には使用できないものの、オンラインでの活動が容易になったり、プロジェクターを使用したりすることで、一度の講演で沢山の人に向けて話ができたりするなど、メリットも多いと考える。

二つ目は、今後の需要の変化である。現在の紙芝居での伝承活動は地元の防災イベントでの読み聞かせがほとんどである。しかし、被災の記憶を伝承する活動は、様々な地域で求められている。最近では南海トラフ地震や首都直下地震などの地震災害への警戒が強められている。被害が予想されている地域への伝承活動をどう広げていくかという点も課題である。

また、紙芝居の原稿を他言語へと翻訳する活動も広がっている。英語だけでなく、韓国語や中国語といったアジア圏の言語への翻訳も行われている。海外での伝承活動にもどのように力を入れるかも課題だろう。

これらの活動はさまざまな助成金、寄付などに支えられていることも分かった。さらに広げて維持、発展させていくためには、それなりの支援も必要になる。震災伝承の有効な媒体として、これらをどう位置付けるか、公的な位置づけを明確にして施策に結び付けることも必要と感じた。

教壇に立つ私たちにとって、紙芝居や絵本、漫画等を震災学習や防災教育の現場でどう活用していけるか、も大きなテーマになる。まずは、これだけの豊富な資料があることを認識し、震災を知らない世代に出来事を伝え、教訓を考えるための素材として。積極的に活用を考えていく姿勢が求められている。

2-3.メンバーの避難体験を紙芝居化するプロジェクト

(1)経緯

私たち次世代伝承班は昨年度の第5期で、メンバーの一人である後藤美姫さんの経験を聴き取り、現地を視察し、後藤さんの実家である定林禅寺の後藤隆善住職から聴き取りも行った。

後藤さんは東松島市野蒜が自宅で、幼稚園児として送迎バスに乗っていた時に被災して避難した経験がある。その経験を紙芝居に仕上げ、震災伝承につなげていくプロジェクトを発案し、取り組みを進めた。

本来であれば、今期で紙芝居の完成まで達成する予定だったが、他の活動との見合いでそこまではたどり着けなかった。シナリオづくりまで整理したことを記録しておく。

(2)第6期でできたこと(シナリオ)

1)紙芝居を通して何を伝えたいかを考えた

・指定避難所が必ずしも安全ではない
・子どもたちにも情報を伝えてほしい　状況が分からないからこそ不安
・助かったからいいというわけではない　正しい判断ではなかったのではないか

2)後藤美姫さんの経験談を9つに分けた

①今の美姫さんの説明
②震災発生前の美姫さんの様子
③震災発生時の状況
④バスで津波から逃げる様子
⑤美姫さんが津波を見た瞬間、おじいちゃんと美姫さんが会ってから自宅に着くまで
⑥お寺での状況
⑦美姫さんが印象に残っている出来事
⑧震災から時間が経ってからの様子
⑨今の美姫さんが伝えたいこと

3)シナリオの骨格

①今の美姫さんの説明

私の名前は「みき」
東松島市の「野蒜」にあるお寺に住んでいるよ。
　→名前か場所をぼかす
　→野蒜小学校のことなどを伝えるには、具体的な場所の説明が必要になる
東松島市は海が近くにあって、「海苔」が有名な場所なんだ。
ところでみんなは、
　→みんなは2011年3月11日に何があったか知ってる？
「東日本大震災」って知ってる？
昔、私が幼稚園の年長さんだった時、大きな地震と津波があったんだ。
今日は、その時に起きたことをお話するね。

②震災発生前の美姫さんの様子

震災発生前、「みき」は野蒜海岸でよく遊んでいた。
(幼稚園のお泊り会・家族)そのため、海を怖いと思ったことはなかった。その時、津波(地震はやってた)の避難訓練はほとんどしていなかった。
2011年3月11日:幼稚園が終わり、「みき」と「弟」はいつものように幼稚園の帰りのバスに乗りこむ。いつものようにバスに乗っていると、ガタンとバスが揺れる。

③震災発生時の状況
幼稚園から家に帰るための送迎バスの中で地震が襲った。
運転手さんがバスから降りて
「バスの故障かな？」
最初はそう思ったが、下校中の小学生の男の子が「地震だよ」と教えてくれたのを聞いた。バスの中ではあまり揺れを感じなかった。

④バスで津波から逃げる様子
全職員も乗せてバスにいた園児を送り届けようとしていたが
（自分の家に着いた子が自分の家のブロック塀が壊れてて泣いていた記憶）、途中で避難所に設定されてる野蒜小学校に避難するために移動した。
しかし、駐車場がすごい混雑していた。小学校の体育館は人でいっぱいだった。
もしこのとき野蒜小学校の体育館に入っていたら…。
私を含め、バスの中にいた園児たちは助からなかったかもしれない。バスはもう一度幼稚園に戻ろうとした。道路は大渋滞でバスは動かない。
そしたら、バスの外でこんな声が聞こえた。
「津波だ！逃げろ！戻って！」
男性の声だった。それが聞こえてくるやいなや、バスは向きをくるっと変えて坂を上りだした。

⑤美姫さんが津波を見た瞬間、おじいちゃんと美姫さんが会ってから自宅に着くまで
たくさんの人が逃げようとしていたため、道路は渋滞していた。
窓から後ろを見ていた。二階建ての建物を壊していく茶色い波を見た。
（津波を知らなかった）
進めずにいたところ、祖父がバスのドアを叩き、「帰るよ」と言われた。
「バスを降りたら死ぬ」と思い、泣きながら拒否したが、「弟」と共に、（無理やり）祖父の車に乗せられ、お寺へ帰った。
バスも祖父の車についていく形でお寺へ向かった。

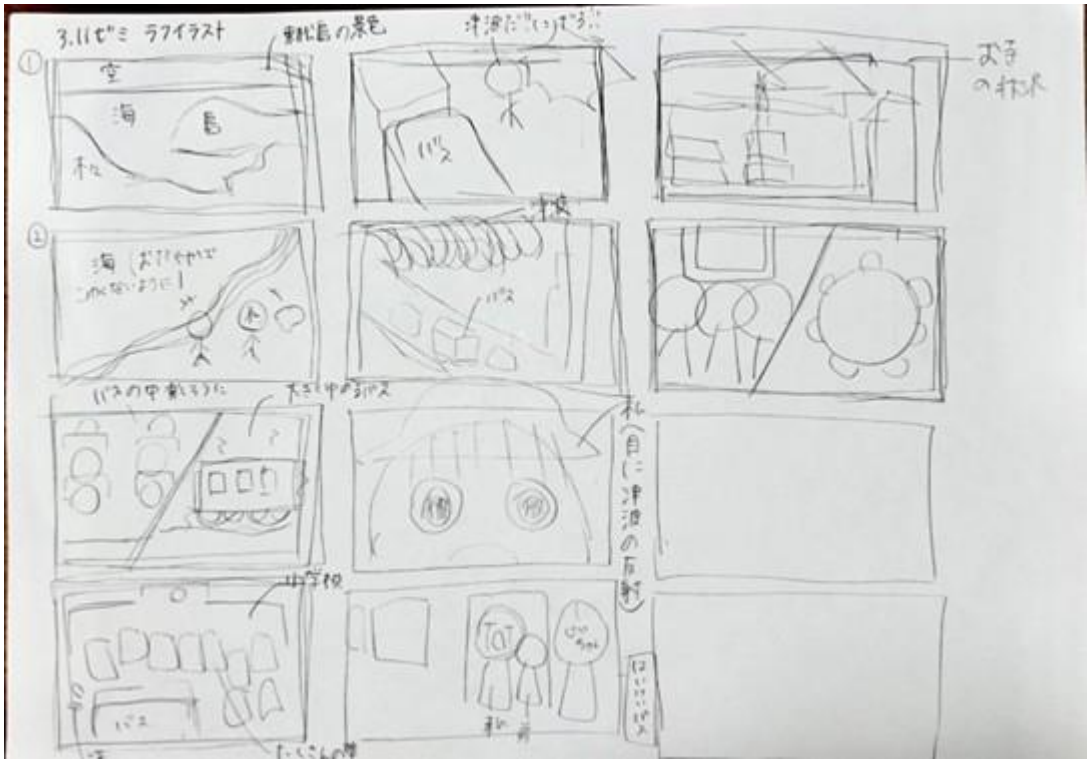
⑥お寺での状況
〈お寺〉簡単な説明だけで終わる
→お寺には十分なスペースがあり、食料があったことなどから避難所のようになっていた。
→余裕があれば、情報をつけ足していく
本堂と本堂に向かう途中にある部屋を避難部屋としていた。
足を伸ばしたい人は廊下で寝ていた。
厨房ではガスが使えたため、ガスコンロでご飯を炊き、婦人クラブの方々がおにぎりを握った。
自分の食べる分以外のおにぎりを取っていく人もいた。
近くの農家の方が持ってきた貯水タンクから飲み水を確保した。
簡易ストーブを持ってきたこともあった。
3月12日、廊下は支援物資で埋まっていった。
毛布の支援物資が届き、一人一枚が基本だったが、三枚持っていく人もいた。避難人数の情報が更新されていないこともあり、毛布の数が足りなかった。
基礎疾患や急な体調不良のための薬を持ってきていない人もいたが、看護学校の教官が偶然いたため、わかる範囲で症状を聞いて薬を処方した。
〈みきちゃん〉
自家用車の中でDVDを見ていた。車内には、みきちゃんと兄弟1人、近所の子1人がいた。お母さんは、末っ子である赤ちゃんの子守をしていた。
保護者が迎えに来た子は引き取られ、まだ来ていない子と幼稚園の先生と一緒に余震が続く夜を過ごした。

⑦美姫さんが印象に残っている出来事
バスにずっと揺られて、何が起きているかも全くわからなかったけれど、2階建ての家を壊していく津波がバスの窓から見えて、初めて『死』を身近に感じた。
夜中の余震が続く中で寝ることの怖さ

⑧震災から時間が経ってからの様子
鳴瀬庁舎の一角を間借りして6月位から授業再開(そこで入学式も行なった)
→砂利道を友達と歩いて登校
校庭も少し歩いたところ、体育館も市の体育館
クラスは2クラス合ったけど、教室は1つ
→少ししてからバスで通ったプレハブの2階建て校舎が建つ。そこでの期間が一番長い。
小学校6年生くらいのとき
卒業式は新しい校舎でさせてあげたい！急ピッチで丘の上に新しい小学校が建った。
新しい団地もできて、新しい生活が始まっている。(被災した人の家)

⑨今の美姫さんが伝えたいこと
小さいけれど、恐怖は感じる→説明や安心する何かが欲しかった
避難所だから大丈夫なんてことはない

シナリオをもとに、紙芝居化に向けて描いている絵コンテ



3.メンバーの振り返り

【G3029　原萌夏　4年】

紙芝居制作という大きな目標を掲げた次世代伝承班に、一人のメンバーとして今年も関わることができたことはとても嬉しく思う。しかし、4年生になって教育実習・教員採用試験・卒業論文等々、想像以上に忙しない大学生活になってしまい、なかなか伝承班の活動に深く関わることができずにいた。4年生が顔を出せず、3年生の学年が所属しない中、2年生を中心に紙芝居制作に繋がる視察やインタビュー等、今年度も活発的な活動を計画・実行し、得たことを持って帰ってきてまとめる姿は、とても誇らしく思った。

唯一参加することができたFプロジェクト活動の参加には、絵本や紙芝居での伝承活動をしている佐藤美香さんと直接対談する貴重な機会もあった。ここでのご縁を大切に、自分たちで創り上げることはもちろん大切なことではあると思うが、周囲の先を進んでいるプロたちを頼りながら、オリジナルの紙芝居が出来上がることを願っている。もし機会があれば、紙芝居での伝承活動の場に携われたら嬉しいなとも思っている。

来年度から教員という道に進むにあたり、ここでのつながりや学びをどのように生かしていくか、現場に出ながら模索し、関わる子供たちと一緒に見つめ直していけたらと思う。

【G3033　猪狩光希　4年】

教員採用試験や教育実習が重なり、ほぼ活動に参加することができなかったが、メンバーがインタビューや紙芝居の作成など、聴き取りを形にする活動を丁寧に行ってくれた。感謝してもしきれない思いである。

防災教育・次世代伝承班で学んだこと、経験できたことを来年からは教員という立場で、次世代を担う子どもたちに、生きるために自分たちには何ができるのかを考えさせ、防災や減災の大切さを伝えていきたいと思う。

【G3252　小山有美華　4年】

昨年度の第5期に引き続き、次世代伝承班での活動を行った。卒業研究及び制作、教育実習、教員採用試験、大学院入試と忙しく、現地視察や取材等の学外での活動に参加することが難しかったが、その合間を縫って後輩たちをサポートしながら学内での活動に取り組むことができた。

今年度の第6期では、昨年の活動で得た知見を踏まえ、実話を基にした震災伝承媒体の制作に向けた下準備を進めていった。漫画や動画のみならず、紙芝居や絵本の事例にも触れ、制作者の方や語り部の方に取材した後輩たちの話に耳を傾けつつ、伝承媒体をどのように制作するかを検討することが多くあった。

私は小学校と中学校で教育実習を行ったが、期間中、丁度「みやぎ県民防災の日」や「津波防災の日」と重なった。総合的な学習の時間で、東日本大震災を経験していない児童生徒に対し、当時の出来事を伝えている先生方の姿を見た。当時の状況を知らないため、そのことを口頭で言われても想像が難しく、理解に困惑する児童生徒の様子が印象に残った。今年度は活動機会が少なかったが、採用自治体での名簿登載猶予をいただいた上で教職大学院に進学することが決まった。311ゼミナールについても、継続する予定である。次年度は、後輩たちを中心に見聞してきたことや、教育実習で得た学びを生かし、本格的な伝承媒体の制作に取り組んでいきたい。

【G5079　後藤咲佳　2年】

今年度は10月下旬から入院してしまって大学に行けず、活動の後半から全く参加できず大変申し訳なかった。しかし、伝承班のメンバーたちがいろいろな活動を進めてくださって本当にありがたかった。

私は紙芝居のシナリオを考える活動と10月20日のきずなFプロジェクト住吉小学校の視察に参加させていただいた。その時に紙芝居を披露していたFプロの方々が、優しい言葉で親しみの持てるイラ

ストで声色もメリハリをつけて紙芝居をされていて、小学生のみんなが紙芝居に集中して見ていた姿が印象に残った。
震災を経験していない世代の子どもたちは震災の話は重い話、(言い方はよくないが)真面目でつまらない話だと他人事に考えてしまう人が多いのではないかと思うが、Fプロの方々の紙芝居や紙芝居の後に行っていた防災クイズを通して自分事として捉えることができるようになったのではないかと感じた。物事に対して自分事に捉えることは誰にとっても重要であり、「伝承」をする意義がそこにあると感じる。
今年度は自分が311ゼミの中で震災伝承班に所属していることはとても誇りに思えることなのだと改めて感じられた。そして、(311ゼミの活動ではなく私事で恐縮だが)私が入院している間に「人間1人1人の命の尊さ」と「私たちは生きているようで生かされていること」を再認識した。今後も生きている中で災害は必ず起きると思うので、今や未来を生きる人たちの尊い命を少しでも多く救えるように、過去の災害で失われた命を決して無駄にせず過去から学び、それを「伝承」する活動を今後も続けていきたいと強く決意した。来年度も視察をして美姫さんの経験を基にして制作する紙芝居に活かしていけるようにメンバーたちと頑張りたい。

【G5080　後藤美姫　2年】
今年度は紙芝居の視察に2回も行くことができた。どちらもしっかり観察し、紙芝居を行う上での大事な部分を見させていただいたので、そのよさを自分たちの紙芝居に吸収していきたい。
自身の経験をもとにした紙芝居はシナリオを2年生中心に作成し、コンテを制作、現在はラフ画に取り掛かっている。今年は311ゼミ以外の活動が忙しく、紙芝居を完成させることができなかったが、来年は視察の経験も踏まえてより良いものを制作していきたい。また、今年いけなかった大船渡津波伝承館にも足を運んで、紙芝居に活かしていきたい。

【G5130　関町咲穂　2年】
昨年度は震災伝承漫画『あの日、子どもだった私たちから伝えたいこと』の主人公となった4名の方のお話を基に、有効な震災の伝承媒体について考察した。そして今年度は実際にメンバーの一人である後藤美姫さんの経験を基盤とし、紙芝居による震災の伝承を目標のひとつに掲げ活動した。それに伴い、今年度は伝承活動を行っているFプロジェクトの活動の様子を視察させていただいた。
実際にFプロジェクトが制作した紙芝居の上演に参加したことで、声色や話す速度、イラストや上演方法などについて学ぶことができた。特に、紙芝居は実物とスライドの両方用意すること、優しいタッチのイラストを用いることなどを意識し、来年度の制作を行っていきたい。

【G5179　星陽菜乃　2年】
今年度は、メンバーの一人である後藤美姫さんのお話をもとにした紙芝居を制作することを目標の一つとして活動した。私はシナリオ作りを中心に行った。紙芝居の枚数や、どの場面を用いるのか、何をより強く伝えたいのかを話し合いながら決めていった。
また、伝承活動を行っているFプロジェクトの活動を視察させていただいた。その視察から、人数の多い場所でどのように紙芝居を行うのか、話し方に特徴はあるか、イラストや話の構成はどのようなものになっているのかなどを学ぶことが出来た。特に、聞き終わった後につらい思いが残らなかったことが印象に残っている。
伝承活動は悲惨さを伝えることも必要だが、私たちが本当に伝えたいことは、実際の経験から得られた学びや気づき、後悔、教訓などである。そして、「同じ経験をしてほしくない」という思いから私は伝承活動をしたいと思っている。そのため、悲惨さよりも本当に伝えたいことが伝わるような紙芝居にしたいと思うことが出来た。これらのことを意識しながら、来年度も紙芝居の制作を行っていきたい。

【G6183　深澤このみ　1年】

昨年度から引き継がれている資料を読んだり、実際の紙芝居実演の現場を見学したりする中で、伝承活動の大切さや難しさを学ぶことができた。

自分自身は宮城県でも内陸部の出身であるため、津波や地震の被害の様子を目の当たりにするという経験がなかった。そんな自分が伝承活動に参加するということに少し躊躇いがあったが、他の団体の活動を調べ、震災の記憶を伝えたいという気持ちに触れることで、伝承活動への意欲がより強くなった。10月には紙芝居での伝承活動を見学したが、読み手側だけでなく、聞き手側の反応も見学することができた。見学を通して伝承活動を始めること、続けることの大切さに気が付くことができた。来年度は自分たちの伝承活動についての活動が増えていくと思うが、今年度の活動を活かして、積極的に参加していきたい。

【G6225　渡邊穂香　1年】

紙芝居制作を行っている次世代伝承班に加わり、実際に現地に視察に行ったり、震災を紙芝居という形で後世に伝えている団体を調べ、まとめる活動を行った。

作者の人にお話を聞くことで、紙芝居を簡潔にまとめる難しさや感じていることを知ることができた。東日本大震災とはあまりかかわりのない町で生活してきたため、実際に目で見て話を聞いてということが初めてだったのでいい経験になった。外から来た人なりにもできることだったり考えられることはあると思うので、積極的に活動に参加し、語り継いでいくために伝承活動に参加していきたい。

以　上